

小堂見遺跡

—住宅型有料老人ホーム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2014.3

茅野市教育委員会

序 文

八ヶ岳、蓼科山、霧ヶ峰高原に抱かれた長野県南東部にある茅野市は、豊かな自然に育まれた、日本列島でも稀な縄文文化の華開いた地域です。市内には特別史跡尖石石器時代遺跡、史跡上之段石器時代遺跡・駒形遺跡や、櫛畳遺跡出土の国宝土偶（縄文のピーナス）、中ッ原遺跡出土の重文土偶（仮面の女神）などの日本の縄文文化を代表する文化財が数多く残されており、「縄文の里」として全国にその名を知られています。一方、そうした「縄文」にかけられた感のある弥生時代以降の遺跡や遺物も、近年の市街地周辺における発掘調査で数を増し、その実態が明らかにされ始めています。

小堂見遺跡は八ヶ岳の西麓にある縄文時代と平安時代の遺跡です。これまでに8次の発掘調査等が行われ、縄文時代には集落と狩場、平安時代には集落に利用されたことが確認されました。

今回の調査は、400m²に満たない小規模なものでしたが、縄文時代の土坑と平安時代の堅穴住居址が発見されました。特に八ヶ岳西麓で発見例の少ない11世紀後半とみられる堅穴住居址は、西麓に営まれた平安後期集落の実態や、中世に続く古村との関係を探る上で重要な資料となるものです。

こうした調査成果がまとめられた本報告書が、多くの方に利用され、地域文化向上の一助となれば幸いです。

発掘調査の実施にあたりましては、事業者の田中昭十四様、田中康司様をはじめ、工事関係者の皆さまから遺跡の保護に対するご理解とご協力を賜り、円滑に作業を進めることができました。心からお礼申し上げます。

最後になりましたが、発掘調査に従事された作業員の皆さまに感謝申し上げます。

平成26年3月

茅野市教育委員会

教育長 牛山 英彦

例 言

1 本書は平成25年度に実施した住宅型有料老人ホーム建設工事に伴う長野県茅野市玉川神之原所在の小堂見遺跡発掘調査報告書である。

2 発掘調査は田中昭十四からの委託を受け、茅野市教育委員会が実施した。

3 発掘調査は以下の期間に実施した。

① 本調査 平成25年11月11日～14日

② 算理作業および報告書作成 平成26年1年20日～3月10日

4 発掘調査における委託業者は以下の業者に委託した。

基準点測量 埼玉会社四角測量

5 発掘調査に係わる出土品、諸記録は茅野市尖石縄文考古館で収蔵・保管されている。

6 発掘調査は茅野市教育委員会事務局文化財課が実施した。組織は下記のとおりである。

① 調査主体者 牛山英彦(教育長)

② 事務局 小池沖美(生涯学習部長)

③ 文化財課 鷹飼章雄(文化財課課長兼尖石縄文考古館長) 中村浩明(考古館係長)

④ 稽査担当者 小池岳史(発掘調査・監理作業・報告書担当) 塩澤恭輔 守矢美空 小池岳史

⑤ 発掘調査・整理作業参加者

補助員 牛山矩子 斎井みさを 大勝弘子 武居八千代 立岩貴江子

作業員 宮坂功 柳沢省一

凡 例

1 本書における図面の縮尺は、図面中に記している。

2 図面における遺構の略号は以下のとおりである。

① 1号住居址→1住 ② 1号土坑→1土 など

3 本書における土層の色調は『標準土色帳』を参照した。

第1章 調査の経緯と経過

平成25年11月8日、小堂見（こうみ）遺跡内に計画された住宅型有料老人ホーム建設工事に伴う文化財保護法第93条第1項「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」が生涯学習課に提出された。その際、同日から当該事業に着工したことが伝えられる。この連絡が文化財課文化財係に入り、直ちに現地を確認した。

事業地は小堂見遺跡の東側、神之原の東側集落と同区の共同墓地に挟まれた土地（旧地目：山林）で、東西に長い尾根状台地の頂部付近に位置する。工事の概要を施工業者から聞き取ったところ、建物の基礎工事に先立ち、事業地全体（695.92m²）を南に接する市道の高さにあわせるため、地表から約50cmを掘削し、さらに建設範囲全体（373.68m²）を30cmほど掘削する計画が伝えられた。すでに事業地の南側と東側の境界付近が、明黄褐色土層（ローム層）まで掘削されており、東側境界付近に露出した断面で遺構確認が可能であった。そこで事業者の承諾を得て断面の精査を行い、平安時代の堅穴住居址（2号住居址）と土坑（1号土坑）を確認した。また、これから掘削が及ぶ箇所に遺構があるかを確認するため、事業者に調査の実施について協力を求めたところ、これが認められ、さらに表土除去に使用する重機（0.28m³級）が提供された。文化財課職員立ち会いのもと、調査を進めた結果、新たに平安時代の堅穴住居址（1号住居址）を確認した。事業地に接する市道の高さ、建物の構造ならびに重量との関係から、1号住居址を保護しつつ工事を行なうことは困難であった。再協議の結果、事業者の費用負担で、市教育委員会が本調査を行い記録保存することで合意した。これに基づき、11月11日に発掘調査の委託契約を締結した。

本調査は11日に開始した。8日の作業で調査区北側にロームマウンドと思しい箇所を確認したが、その範囲を特定できないでいた。そこで、その範囲を確認する作業から始めることにした。埋土は縦りの弱い黒褐色土および暗褐色土で大量の明黄褐色土塊を含んでいる。ここから遺物はいっさい出土しなかった。ロームマウンドの可能性が高いとしたが、外側に向かうにつれて地山との区別が困難となり、結局、範囲は明らかにできなかった。なお、中央付近に焼土？を伴う硬化面、その周囲に炭化物の散布を認めたが、調査の対象とすべき時期の遺構といえる所見は得られなかった。遺構名と番号は付していないが、平面図を作成するとともに写真撮影を行い、同日の作業を終了した。

12日は調査補助員と作業員を投入する。1号住居址の遺構検出作業と、2号住居址ならびに1号土坑の断面を精査し、その状態を写真撮影した。同日、測量業者が基準杭を設置した。作業時間の短縮、費用の削減を考えて、基準点は任意に打設し、これを世界測地系により座標化することにした。

13日は1号住居址の土層断面図を作成した後、床まで掘り下げ、完掘状態の平面図の作成と全体・細部の写真を撮影した。あわせて2号住居址と1号土坑の断面図を作成した。なお、事業者ならびに施工業者の配慮により、工事に伴う掘削を地表下80cmから60cmに変更する意向が示され、1号住居址の床より下（掘方）が建物基礎の碎石下に保存されることになった。そのために本遺構の調査は床までに留めている。

調査最終日となる14日は、1・2号住居址と1号土坑のレベル計測、1号住居址カマドの解体作業を行った。

第2章 遺跡の位置と諸環境

小堂見遺跡（No.160）は、茅野駅の東方約3.5km、玉川地区神之原地輪（玉川[3251-4、3255-1]）に所在する。八ヶ岳の西麓に発達した東西に長い台地上に立地し、広域農道（通称：ふるさとグリーンライン）が横断する台地幅150mほどの地点から、東西に約300mの広がりをもつ。遺跡の面積は約28,000m²、遺跡内の標高は891～904mを測る。

本遺跡では、平成3年の宅地造成工事に伴う発掘調査以降、平成22年まで8次の調査等によって、遺跡の西半に縄文時代中期初頭の集落、東半に平安時代（9世紀代）の集落が確認された。また、縄文時代の落し穴も発見され、時期によっては狩場に利用されている。これらの遺構はいずれも、八ヶ岳の西麓において、通常、遺構検出の少ない北向きの斜面から発見された。その要因として、北側斜面が南側斜面よ



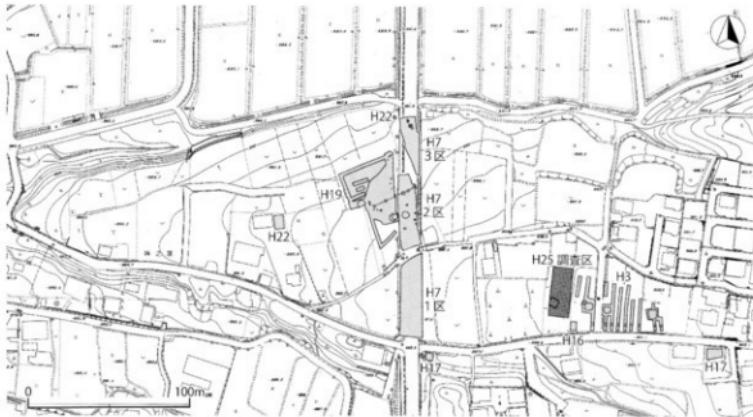
第1図 遺跡位置図 (1/200,000)

り傾斜が緩やかであること、北側斜面の裾から水量豊富な清水が湧き出しが指摘されている。

本遺跡とその周辺は、玉川地区の中でも多くの遺跡が残されており、特に縄文時代の遺跡は台地每に立地するかの状態である。北側の台地には、前期末葉から中期初頭の住居址4軒、平安時代の住居址1軒、中世の地下式坑1基などが発見された上御前遺跡、南側の台地には、縄文時代中期の土器片と磨製石斧などが散布し、時期不明の土坑が発見された久保川遺跡がある。また、本遺跡の東方約600mの地続きの台地上に、ヒスイ製垂飾を伴う土坑などが発見された縄文時代中期の集落遺跡とみられる山田畠遺跡があり、その南側の台地に古くから知られた縄文時代中期の拠点的な集落遺跡である藤塚遺跡が立地する。

小堂見遺跡主要発掘調査等一覧

調査年	地点	調査範囲	調査期間	調査面積	主な遺構	調査成果・所見
平成3年 (1991年)	遺跡東側 台地裏面	宅地造成	10月下旬	250m ²	縄文時代 土坑(蓋なし)1 平安時代 住居址3(9世紀)	本遺跡における最初の発掘調査である。調査の結果、縄文時代は狩猟、平安時代は農耕に利用されたことが確認された。平安時代の堅穴住居址は、出土した土器からみて、すべて9世紀代と考えられる(未報告)。
平成7年 (1995年)	遺跡中央 右端平坦面～ 左側斜面	県庁城廻道	5月15日～ 8月4日	1,420m ²	縄文時代 中期前半住居址1 土坑(蓋なし)または堅 坑、堅穴6-17	縄文時代中期前半の堅穴住居とみられる土器が2件 見された。新たに幾代交代の堅穴住居が確認された。これらの 縄文時代の遺構は、通常、遺構が残るされることが多い堅穴 住居面から見つかっている。北側斜面の堅穴が南側斜面より 緩やかなどに起因すると指摘される。
平成16年 (2004年)	遺跡東側 台地裏面	個人住宅 堀塁	10月5日	80m ²		平成3年の台地裏面に伴う調査区の南西端に位置し、点検ト レンチからはすれ違った場所である。芯柱の下に削籠構造の一 方に古い黄褐色土層が残り、その下の新黄褐色土層に堅穴が及 んだ。平面と断面を精査したが、遺構と遺物は確認されなかっ た。
平成17年 (2005年)	遺跡中央 台地裏面	賃貸住宅	3月17日	20m ²		現状は特石敷きの土地である。その上成時に明治褐色土層まで削平されたようである。この面を調査したが、遺構と遺物 は確認されなかつた。
平成17年 (2005年)	遺跡東側 右端平坦面	個人住宅	12月21日	57m ²		建物の外壁を施設する基礎工事に立ち会った。遺構は確認 されなかつたが、黒褐色土層から加藤石2点が出土した。 表土下の1層堆積状態から、台地に接する浅い谷が形成か ら入ることを確認した。
平成19年 (2007年)	台地中央 右側斜面	店舗 医療施設	4月16日～ 27日	560m ²	縄文時代 中期前半住居址3 土坑79(堅穴6または 墓坑、蒸し穴、住居址 の構穴を含む)	平成7年調査区の北側斜面が調査され、一部に広がる中期 前半集落の一部が確認された。調査した北側斜面には、北か ら西へ4ヶ所入り、門1枚の大型遺構となるが、この外の中段 土坑が集中し、1坑を跨ぐように他の隣辺に堅穴住居址が 分布する。この状態から、南北70m、東西130mほどの北 に隣接する馬蹄形の集落が推測された。
平成22年 (2010年)	台地裏面 平坦面	個人住宅 (RM)	8月26日	21m ²		建物の外壁を施設する基礎工事に立ち会い、脚部が丸みだ 黄褐色土層～明治褐色土層を発見した。遺構と遺物は確認 されなかつた。
平成22年 (2010年)	台地中央 北側斜面	移動通勤 加藤基地局	12月6日	1m ²		1.5m四方の一角を調査したが、遺構と遺物は確認されなかつ た。



第2図 発掘調査位置図（1/3,000）

第3章 発掘された遺構と遺物

発掘された遺構は、平安時代の竪穴住居址 2軒と土坑 1基である。遺物は、平安時代の土師器壺・皿・甕、須恵器壺、灰釉陶器碗、コモ編石、鉄製品?、黒曜石が出土した。

1号住居址 調査区の西側境界に遺構の一部がかかる上、東コーナー付近が工事で失われたが、南北 5.2 m、東西 5.1 m の方形プランと確認された。壁は高さが 5 ~ 15 cm を測り、床からの立ち上がりは明瞭である。壁下に周溝は確認されなかったが、南壁下の床に置かれた大きな礫や P 3 を覆う厚い焼土との間に、周溝に代わる 15 cm ないし 20 cm ほどの空間がある。ここに壁の崩落を防ぐための土留め、あるいは「壁体」などの存在が推測される。これを補強するためのものなのか、南壁下の床に板状ないし柱状の大きな礫（安山岩）が壁に平行して置かれている。床は平らで、壁下を除き硬化する。その面は住居範囲のほぼ全体を掘り堀めた後、暗褐色土やにぶい黄褐色土を埋め戻してつくられる。本址の西半、西壁と北壁が交わるコーナー付近を中心に焼土が確認された。この焼土は壁側から住居内に向かって高さを減じるため、壁側がある程度埋まつた後（第 4 図 A 断面の第 3 層堆積後）に火を受け、形成されたものと考えられる。P 3 付近が最も厚く 10 cm に及ぶ。壁際から 5 箇所の穴が発見され、P 4 のみ貼床が確認された。P 1 ~ P 3 は直径 70 ~ 80 cm、深さ 37 ~ 51 cm を測る。深さが不揃いな上、埋土となる黒褐色土中に柱痕が認められなかつたが、位置と断面形状から判断して柱穴と考えられる。P 1 では根固めに使われたとみられる礫が掘方に沿って多数出土した。直径 35 cm、深さ 28 cm を測る P 5 も柱穴で、ここから出土した板状礫もやはり根固めと思われる。貼床された P 4 は P 1 ~ P 3 と位置・規模・形状が類似する。古い柱穴を考えることもできるが、埋上がローム塊を大量に含む黒褐色土上で、一度に埋め戻されたような状態を示すため、貯蔵穴のような空間を必要とする穴の可能性がある。カマドは P 1 と P 5 に挟まれたコーナーにあり、礫（安山岩）と粘土でつくられる。軸方向は S - S' - E を指す。両袖の芯材となる 10 点余りの板状礫以外は、原位置を留めていない。動かされた礫の多くは焚き口部から東側に散在するが、中には重ねられたように見えるものもある。焼き口部から燃焼部はもちろん、奥壁や両袖の礫の外側までしっかり焼けていて、その厚さは最大 8 cm を測る。埋土はレンズ状に堆積し、3 層に分層された。第 3 層は土質ならびに含有物から、先に記したような壁の内側をめぐる構造物の崩落土と考えられる。一方、第 2 層および第 1 層は自然堆積層と思われる。

出土遺物には土師器壺・皿・甕、須恵器壺、灰釉陶器碗、コモ編石がある。その多くは、火を強く受けたP3・4とその周辺から出土した。土器類の中心は土師器壺・皿である。少なくとも7個体分が出土し、4個体を図示した。いずれもP3・4付近の第2層下位から焼土上にかけて出土した。図示した灰釉陶器碗はP4上の焼土に食い込み出土し、内外面に煤が付着する。コモ編石とみられる柱状・塊状の礫10点が、P4と壁に挟まれた僅かな空間から、床に密着して出土した。焼土に覆われるため、火を受ける前にまとめて置かれたものであろう。その5点に煤の付着が認められる。その他、黒曜石が8点出土した（原石・剥片・碎片・両極打撃痕のある石片・総重量31.7g）。

本住居址は住居の構造と出土した土師器壺・皿の形状からみて、11世紀後半の竪穴住居址と考えられる。

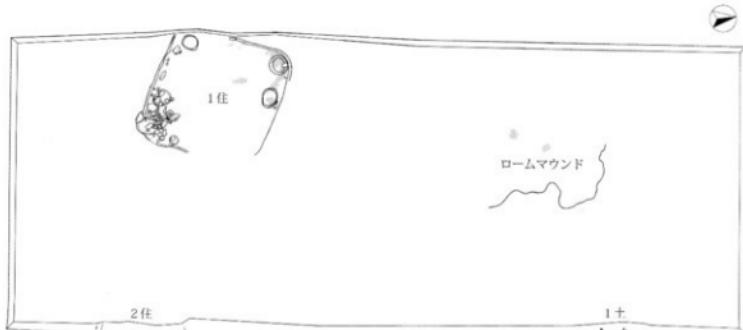
本遺跡が所在する八ヶ岳の西麓（茅野市域）では、これまでに多くの平安集落が調査され、その多くが11世紀前半までに消滅することが確認されている。『祝詞段』（1237）によると、本遺跡が所在する神之原は中世から続く古村で、古くは「原」と呼ばれていたようであるが、こうした中世から続く古村の成立時期や出現の背景を明らかにする上で、本住居址は重要な資料になるものと思われる。

2号住居址 調査区の東断面で存在が確認された上、耕作による搅乱が床付近まで及び、壁となる立ち上がりが失われていた。そのために平面規模ははっきりしないが、埋土の広がりから南北3.4m以上の大きさであることがわかる。本住居址は明黄褐色土層を掘り込みつくられるが、断面によると、壁下を溝状に掘り窪め、中央付近に高く平らな面を作り出した後、その面にあわせて黒褐色土などを埋め戻してつくられている。こうしてつくられた床は、平らで非常に硬い。埋土は2層に分層された。第3層は1号住居址の壁際でみられた第3層と類似する。第2層は黒味の強い黒色土である。色調や粒子が均一であるため、自然堆積層と考えられる。

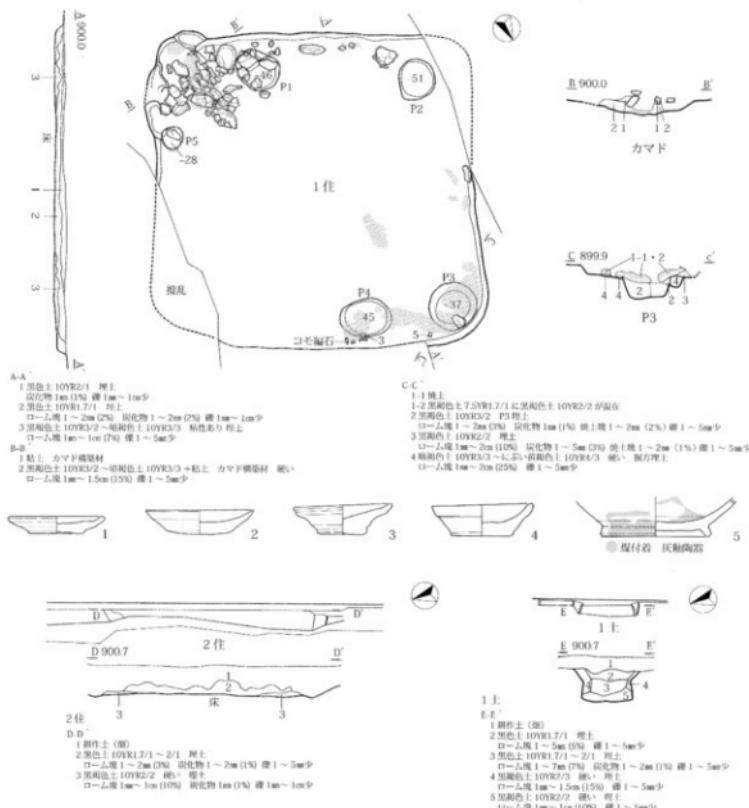
出土遺物は少なく、須恵器壺の小破片が3点出土しただけである。

須恵器壺の時期が9世紀後半と考えられるため、この時期に属する竪穴住居址の可能性がある。

1号土坑 調査区の東断面で存在が確認されたため、平面形は不明である。断面に土坑の中心がかかり、円形プランであるならば、上面径は110cm、底面径は85cmとなる。現存する深さは53cmを測る。断面形は「袋状」を呈し、中段を境に上位が大きく外反し、下位が袋状に抉れている。その形状から判断して、落としへまたは貯蔵穴と考えられるが、東に接する平成3年調査区から落しへが発見されていることから、その可能性が高いように思われる。4層に分層された埋土は、堆積状態からみて、いずれも自然堆積と考えられる。埋土から黒曜石の碎片が1点（5.4g）出土した。



第3図 遺構全体図 (1/400)



第4図 遺構平面図・土層断面図(1/80)、1号住居址出土土器(1/4)

報告書抄録

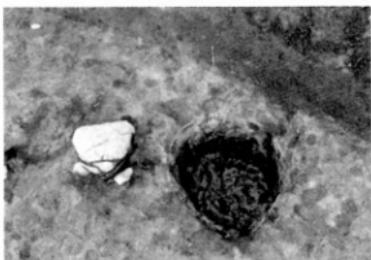
ふりがな	こどみいせき						
書名	小堂見遺跡						
副書名	住宅型有料老人ホーム建設工事に伴う理産文化財発掘調査報告書						
著者名	小畠史史						
編集機関	茅野市教育委員会						
所在地	〒391-8501 長野県茅野市塚原二丁目6番1号 TEL 0266-72-2101						
発行年月日	西暦 2014年3月28日						
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
小堂見	茅野市玉川神之原	20214 160	36度 59分 30秒	138度 11分 22秒	20131111 20131114	374m ²	住宅型有料老人ホーム建設工事に伴う緊急発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な土器	特記事項		
小堂見遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	土坑1 竪穴住居址2	平安時代の土器 須恵器・灰釉陶器、 コモ編石	八ヶ岳西麓で発見例の少ない11世紀後半の竪穴住居址が発見された。		



(1) 1号住居址(北東から)



(2) 1号住居址カマド(北西から)



(3) 1号住居址P 2と板状礫(北東から)



(4) 1号住居址P 3と焼土(南東から)



(5) 1号住居址P 4の土層断面(南から)



(6) 2号住居址(西から)



(7) 1号土坑(西から)

小堂見遺跡

一社型有料老人ホーム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

平成26年3月25日 印刷

平成26年3月28日 発行

編集 長野市教育委員会

発行 長野県茅野市塚原二丁目6番1号 (0266) 72-2101(代)

印刷 有限会社 アドウェーブ

長野県茅野市塚原二丁目5番51号